

# 『永平広録』 卷十所収の「偈頌」について

菅 原 論 貴

はじめに

『永平広録』卷十には、真賛五首・自賛二十首・偈頌一二五首が収録されているが、このほかに卷一から卷七の上堂語中には、一七五首の詩偈があり、さらに卷九所収の頌古に含まれる一〇二首を加えると、『永平広録』における偈頌の総数は、およそ四二七首となる。<sup>(1)</sup>

なお、『永平広録』以外にも、「一葉観音賛」、「達磨賛」、「賜紫衣謝偈」、「上洛療養偈」、「遺偈」、「吉祥山命名法語」と「尽未来際不離吉祥山示衆」中に付載される偈頌など、その撰述の真偽はともあれ、道元禅師の作頌として伝えられるものは多く存するのである。

『永平広録』卷十所収の「偈頌」について (菅原)

ところで、『正法眼蔵隨聞記』には、「今代の禅僧、頌を作り、法語を書かん料に、文筆等を好む。是、則、非也。頌、不作とも、心に思はん事を書たらん、文筆不調とも、法門を可書也。<sup>(3)</sup>」とあるように、一見すれば、禅師は出家学道者にとって詩作は無益どころか、仏道を障うる要因として、自らはもとより学人に対しても厳しく戒められたかに思われる。

それ故、斯かる厩大な作頌が何故行われたかという疑義が生ずるところであるが、このことに関しては既に諸先学により種々の説が提示されており、<sup>(4)</sup>非常に関心をよぶところでもあるが、今回はこのことに関してふれぬこととする。

本稿では道元禅師の偈頌について、特に『永平広録』卷十所収の「偈頌」の標題を有する一二五首に限定して、詩作の諸形式・特殊な用例などに視点を据えて、卍山本と門鶴本との比較を通して、禅師の作頌の特色について検討したいと思う。

### 一 偈頌の形式

もともと偈頌の形式は、荷沢神会以後の成立とされ、特に禅の盛んな唐代においては、禅僧の悟境や境界の開陳という心的様態の手段として用いられていたが、宋代になるとさらに文学性や詩的表現が加わり、偈頌本来の性格を損なう危険性を有するものもでてきた。<sup>(5)</sup>

偈頌は詩句で仏徳を讃歎し、禅旨を述べたもので禅詩の総称であるが、平仄等の形式や「情感」、「品性」などにあまり拘らず、自由奔放なところが禅の自在な作用であったとも言われる。しかし、偈頌といえども漢詩からの派生である以上、ある程度の体裁を有するものでなくてはならない。

一般に漢詩は古詩と近体詩に大別され、古詩は四言詩・

五言詩・七言詩・歌行・樂府とであり、近体詩は絶句・律詩(排詩)に分類される。そこで実際に道元禅師の偈頌一二五首の形式についてみると、次のように分類される。

\*括弧内の数字は卍山本の列次番号を示したものである。

#### (一) 七言絶句〔一二〇首〕

- (2) (3) (4) (5) (6) (7) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26)
- (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (40) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52)
- (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77)
- (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101)
- (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125)

#### (二) 七言律詩〔四首〕

- (1) (8) (39) (41)

#### (三) 特殊な形式〔一首〕

(63)

右によつてみるに、七言絶句が一二〇首、七言律詩が四首、そのほか古詩に属すると思われるものが一首あり、大部分が七言絶句により構成されていることが知られる。

それでは何故道元禅師には七言絶句による作頌が多いのであろうか。このことは中国の禅匠にも共通するところ

あり、鈴木哲雄博士のご研究によれば、『祖堂集』、『景德伝灯録』中に存する偈頌は三百八十余首を数えるが、七言句の偈頌が百五十余首と最も多いことが指摘されている。<sup>(6)</sup>

もともと七言絶句の淵源は、五言絶句に後れ六朝時代の成立であり、唐代に入つて花開き、盛唐に実を結んだとされている。<sup>(7)</sup>この風潮は既述の如く、唐代の禅僧の作頌にも積極的に多用されたものと思われる。

また現今においても七言絶句による詩作が多いのは、作詩法として五言のほうが七言より難しいとされ、<sup>(8)</sup>形体的な作詩法からみても、律詩より絶句のほうが容易であり、「起承転結」の展開法や四句の限定により切り詰められた言葉が却つて深い含蓄を有するからでもある。<sup>(9)</sup>

さらに『如浄語録』には、偈頌二十首が収録されているが、<sup>(10)</sup>全て七言絶句の形式であることから推すれば、先師如浄の偈頌も道元禅師の作頌に影響を及ぼしたものと思われる。

次に七言律詩についてみると、標題に「和王員外韻」・「續溥侍郎韻」・「和李通判韻」・「與郷間禅上座」とあり、四首共に入宋時の作頌であることが知られる。それはおそらく

『永平広録』卷十所収の「偈頌」について（菅原）

道元禅師の天童山留錫中に接触した高官名士や禅人との間で交わされた参禅弁道を中心とする偈頌であろうが、そのうち三首は和韻の形式を有している。

和韻は他者の詩と同一の韻を用いて詩作されるもので、中唐以後に盛んに行われるようになったものである。<sup>(11)</sup>従つて、道元禅師において僅かではあるが七言律詩の用例が見出されることは、士庶禅人から贈られた偈頌がおそらく七言律詩であつた故に、その贈答の偈頌に対して、当時通例であつた和韻の用法をもつて示されたものと思われる。

ただ「與郷間禅上座」と題する隆禅に対する偈頌については、直接には和韻の形式は認めがたいが、その用例に準ずるものか、あるいは道元禅師により特別の配慮をもつて作頌されたものであることが思考し得るのである。

なお、このほかに特殊な用例として「禅人求頌」と題する偈頌があり、いま卍山本と門鶴本との対比によって示せば、次のようである。

「禅人求頌」（卍山本）

「与禅人求頌」（門鶴本）

即心即佛

即心即佛

行難説不難

行難説不難

非心非佛

即心即佛

説難行不難

説難行不難

右によつて知られるように、この偈頌は第一句、第三句が四字からなり、第二句、第四句が五字という変則的な形式により構成されており、古詩に分類すべきものかと思われる。

卍山本・門鶴との対照においても「非心非佛」と「即心即佛」との相違こそ認め得るが、全く同一の形式を用いていることからしても、この偈頌は道元禪師が一禪人の求めに応じて作頌されたものであることが首肯し得るのであり、時には定型化された形態に拘泥することなく、自在な方途を用いて詩作されたことが知られるのである。

## 二 押韻について

七言絶句においては、起句、承句、結句には同一種類の韻字を用いるのが通例であるが、道元禪師の偈頌では、起句を仄字とした「踏落」の用法が多用されている。いまそれを摘記すれば次のようである。

\*括弧内の数字は卍山本の列次番号を示したものである。

### (一) 卍山本・門鶴本共通の「踏落」〔五八首〕

- (3) (4) (5) (6) (8) (11) (12) (13) (17) (20) (21) (22) (25) (30) (37) (39) (40) (41) (43) (56) (57) (62) (66) (70)
- (72) (73) (75) (76) (77) (78) (81) (83) (87) (88) (89) (90) (91) (94) (95) (98) (99) (101) (102) (104) (105) (106) (107) (109)
- (111) (112) (114) (116) (118) (119) (120) (121) (123) (124)

### (二) 卍山本特有の「踏落」〔二首〕

- (44)
- (45)

### (三) 門鶴本特有の「踏落」〔五首〕

- (29)
- (42)
- (69)
- (71)
- (74)

右によつて明らかかなように、偈頌一二五首に存する「踏落」の用例は、卍山本では六十首、門鶴本では六三首あり、これによつて「踏落」を有する偈頌がいかにも多いかが知られる。それでは何故道元禪師の偈頌には「踏落」の用例が多いのであろうか。

もともと「踏落」の用法は、詩作上止むを得ない時の便法であり、軽率に使用すべきでないとされている。特に偈頌の場合には、山号・寺号・地名等を挿入するため「踏落」の用例が多くみられる<sup>(12)</sup>。

従つて、道元禪師の立場からすれば、作頌においては漢詩としての高い文学性の要求などは問題ではなく、どこま

でも学人への指標、教導の方途であるがため、詩作の諸条件の具備に心を注ぐことは、却って自らの宗教性を喪失せしめるものであり、むしろそうした形骸化からの脱皮こそ偈頌本来のいきいきたる自在さの表詮であつたものと思われる。

次に韻を踏まない特殊な用例について検討してみるに、先ず偈頌第二六・第二七には次のようにある。

(一) 偈頌第二六

(正山本)

〔看然子終焉語〕  
廓然無聖硬如鐵  
試點紅炉銷似雪  
更問而今何處去  
碧波心裡不看月

(門鶴本)

〔看然子終焉語〕  
廓然無聖硬如鐵  
試點紅炉銷似雪  
更問今畝何處去  
碧波深處看何月

(二) 偈頌第二七

(正山本)

爍破從來一版鐵  
銷鎔直下六花雪  
天邊玉兔落潭底

(門鶴本)

爍破從來一版鐵  
莫知落處六花雪  
天邊玉兔無潭底

〔永平広録〕卷十所収の「偈頌」について(菅原)

拗折指頭應見月

指折如何未見月

右によつてみると、偈頌第二六・第二七は共に「看然子終焉語」の標題を有しており、「然子」という人物については、『永平広録』卷八の「法語」九に出づる「然公」、及び「法語十二」にみえる「了然道者」とは別人であり、おそらく道元禪師在宋中に相見された中国僧であつたと思われる<sup>(13)</sup>。

この二つの偈頌には押韻がなく、七字目が起句から結句まで「鐵・雪・去・月」全て仄字で統一されている。さらに偈頌第二六は一字目が「仄頭」であり、偈頌第二七は第一句が「下三連」を犯している。従つて、この二首は漢詩の規則からすればかなり逸脱したものであるといえる。

(一) 偈頌第三六

(正山本)

說妙談玄総掠虚  
忘言獨坐口如槌  
初非把定誇孤絶  
百草頭邊盡發揮

(門鶴本)

說妙談玄達者誰  
忘言閑坐口如錐  
通宗通説好知識  
百草頭辺光轉輝

(二) 「起」・「承」・「結」句の韻

(正山本)

(門鶴本)

(起) 「虚」——上平六魚 「誰」——上平四天

(承) 「槌」——上平四支 「錐」——上平四天

(結) 「揮」——上平五微 「輝」——上平五微

右によって明らかかなように、門鶴本の起句と承句は「上平四天」の韻で共通しているが、結句の「輝」の韻は「上平五微」となり不整合である。また正山本では、起句が「上平六魚」、承句が「上平四天」、結句が「上平五微」とあり、全て異なる韻を用いている。

このことは通韻の用法によれば、「四天・五微・六魚」は、古詩においては互いに相通じ同一の韻として用いられたようであるが、近体詩の絶句においては、起句のみ通韻が許されることとなっており、<sup>(14)</sup>ここでは通韻の用法は適用されないが、おそらく道元禅師は、禅門において偈頌という立場から形式よりも法の授受に重きを置き、古詩の用例に慣い通韻の例外を敢えて断行されたのではないかと推するるのである。

更に偈頌第八二・第八四・第八五・第八六についてみる

と、次のようである。

(一) 偈頌第八二

(正山本)

(門鶴本)

「十六夜頌即心見月」

「十六夜頌即心見月」

拈来公案難休歇

拈来十六夜公案

身月欲圓心月闕

身月欲圓心月缺

非暗非明即月生

見月纔明即月生

如何捉得中秋月

如何捉得中秋月

(二) 偈頌第八四

(正山本)

(門鶴本)

「十五夜頌家々門前照明月」

箇々圓成無欠闕

眼皮綻又齒門闕

家々門巷照明月

高者眼睛明見月

銀蟾假使沉黑山

空表蟾光縱黑山

玉兔從他墮鬼窟

從他玉兔落鬼窟

(三) 偈頌第八五

(正山本)

(門鶴本)

「十六夜頌處々行人共明月」

不論南北及東西

「十六夜處々行人共明月」

不論南北及東西

五十年來乘此月  
可惜上天銀桂枝  
人間錯道乾屎橛

五十年來乘此月  
可惜上天銀桂枝  
人間錯道乾屎橛

(四) 偈頌第八六

(卍山本)

(門鶴本)

「十七夜頌騎鯨捉月」

「十七夜頌騎鯨捉月」

龜毛兔角鼓溟渤  
覓背竜鱗任出沒  
剋掘虛空索未休  
今宵始捉水中月

竜鱗兔角帶龜毛  
致雨興雲見路滑  
剋掘虛空索未休  
今夜始捉水中月

右の四首の偈頌は、天童如浄が清涼寺に住して、八月十五日の中秋の明月に示衆した上堂語中に存する「即心見月」、「家々門前照明月」、「處々行人共明月」、「騎鯨捉月」の語を踏まえて、道元禪師が「十五夜」、「十六夜」、「十七夜」の三夜にわたって学人と共に詩作したものである。

ところがこれらの偈頌には押韻が存せず、共通して七字目が起句から結句まで「仄仄平仄」の形態を有していることが認められる。ここで禪師は、漢詩一般の押韻といった用法によらず、標題の字句あるいはその主旨を鑑みて適宜

『永平広録』卷十所収の「偈頌」について(菅原)

作頌を試みていることが知られる。

このような大胆な用例は、古来の中国禅林の禅僧の偈頌に存在していたものか、あるいは道元禪師一人による独自の考案によるものか、現時点では判然とせず、今後検尋すべき課題であろうかと思う。

三 その他の規則について

漢詩には「二四不同」、「二六対」、「下三連」、「孤平」、「孤仄」、「平韻」、「仄頭」、「不粘格」など遵守すべき規則、禁止事項が存する。いま、道元禪師の偈頌中より如上の規範に違背するものを摘出すれば、次のようである。

\*括弧内の数字は卍山本の列次番号を示したものである。

- (一) 「二四不同」に反する偈頌
  - 〔卍山本〕——(25)(39)(95)(109)(120)
  - 〔門鶴本〕——(25)(33)(34)(43)(57)(98)(109)(120)
- (二) 「二六対」に反する偈頌
  - 〔卍山本〕——(1)(84)(90)(101)(101)(109)(124)
  - 〔門鶴本〕——(42)(65)(95)(109)(124)
- (三) 「下三連」を有する偈頌

〔正山本〕——(1)(2)(11)(18)(27)(60)(66)(90)

〔門鶴本〕——(1)(2)(11)(18)(27)(39)(60)(66)(84)(86)(95)(109)

(四) 「孤平」を有する偈頌

〔正山本〕——(1)(18)(31)(51)(72)(91)(95)(96)(102)(110)(116)(118)

〔門鶴本〕——(1)(18)(31)(51)(55)(72)(91)(96)(98)(102)(103)(109)(118)

(五) 「孤仄」を有する偈頌

〔正山本〕——(3)(6)(8)(17)(96)

〔門鶴本〕——(3)(6)(8)(17)(50)(96)

(六) 「仄頭」を有する偈頌

〔正山本〕——(5)(6)(17)(21)(26)(31)(35)(38)(56)(76)(80)(93)(102)(117)

〔門鶴本〕——(5)(6)(17)(21)(26)(31)(43)(76)(80)(81)(89)(102)

(七) 「不粘格」を有する偈頌

〔正山本〕——(13)(17)(109)

〔門鶴本〕——(13)(33)(34)(86)(109)

右によって明らかかなように、道元禪師の作頌は、既述の押韻の如く漢詩一般の規則より鑑みれば、甚だ違背していることが認め得る。

このことは一見すれば、『正法眼蔵』撰述において、二訂三訂を重ね、彫心鏤骨された禪師の推敲の姿勢からすれ

ば、いかにも齟齬するものといえよう。

ただ、道元禪師の『正法眼蔵』撰述の様相をみるに、經典、祖録を依用しながらも、自らの宗要の開陳にあたっては、仏典や古則公案の原意とは甚だ異なる独特な読み方、解釈をもって説示が行われているのである。

従って、道元禪師の「弘法救生」の発露行の立場からすれば、いかに仏陀が明証開顯し、祖師に行持せられた仏法を学人に道著せしめるかが最大の関心事であり、それ故、冷暖自知の体験を概念の世界で説く困難さは、もはや普通の表現ではおさまらなくなるのである。扱い難い素材や単語を用い、奇抜な着想を偈頌に托するならば、時には道元禪師の詩作にみられるような漢詩の慣例を打破することも要求されたものと思われる。

以上、『永平広録』卷十所収の偈頌一二五を中心に道元禪師の作頌の特色についてみてきたが、前述の如く禪師には、更に多くの偈頌が存するのであり、今後はそれらの偈頌をも十分視座に入れながら検討したい。



註

- (1) 渡部賢宗・大谷哲夫監修『祖山本永平広録考注集成』（一穂社）下巻、四五九頁参照。
- (2) 鏡島元隆「詩僧道元禪師」（『續輯永平正法眼蔵蒐書大成』月報二、平成三年三月、一頁）、伊藤秀憲「吉祥山命名法語」解題（『道元禪師全集』第七卷、三八七―三八八頁）参照。
- (3) 『道元禪師全集』第七卷、九〇頁。
- (4) 前掲「詩僧道元禪師」一一二頁。
- (5) 鈴木哲雄『唐五代禪宗史』（山喜房佛書林、五三二―五四五頁）参照。
- (6) 同右書、五五五頁参照。
- (7) 飯田利行『漢詩入門韻引辞典』（柏書房、七〇頁）参照。
- (8) 山口晴通『詩偈指南』（曹洞宗宗務庁、一一〇頁）参照。
- (9) 偈頌研究会『禪林偈頌作法入門』（斎々坊、八二頁）参照。
- (10) 鏡島元隆『天童如浄禪師の研究』（春秋社、三八〇―三九七頁）。
- (11) 有賀要延『僧林漢詩作例講義 入門篇』（国書刊行会、一四五頁）参照。
- (12) 前掲書『詩偈指南』九二頁。
- (13) 『道元禪師全集』第四卷、二六二頁。
- (14) 前掲書『僧林漢詩作例講義 入門篇』一四五頁、前掲書『詩偈指南』八六―八八頁参照。
- (15) 『如浄語録』には「中秋上堂。雲散秋空。即心見月。舉

『永平広録』卷十所収の「偈頌」について（菅原）

拂子云。看。家家門前照明月。處處行人共明月。騎鯨捉月。撐船載月。忽然月落夜沈沈。笑殺胡僧齒門缺。」とある。